

Events

関連プログラム

	イベントタイトル	日時	出演・講師
1	出品作家4組のリレートーク	11/3(日・祝) 13:00 – 14:00	Nadegata Instant Party、松本和子、平野真美、宮田篤＋笹萌恵
2	アートまるケット 「岐阜の食でおいしさまるケ」再び！ フードショップ特別出店	11/3(日・祝)	出店：パンと猫日和 Coneru 企画：岐阜県美術館後援会
3	カジュアルトーク 再会！松本和子×北方町の方々	11/4(月・振休) 14:00 – 15:00	松本和子、坂田勝臣、杉山正彦、長縄等
4	紅茶を楽しむTea Party！ワークショップ	11/23(土・祝) 14:00 – 16:00	西願将也(annon tea house)
5	ギャラリートーク 担当学芸員といっしょに セカンド・フラッシュ(展)を味わおう！	12/20(金) 18:30 – 19:00	鳥羽都子(担当学芸員)
6	カジュアルトーク Nadegata Instant Party × 平林恵、福井清治	12/21(土) 14:00 – 15:30	Nadegata Instant Party、 平林恵(横尾忠則現代美術館学芸員)、 福井清治(養老町立上多度小学校校長)
7	平野真美×ナンヤローネ アートツアー 信頼できない語り手	12/22(日) 14:00 – 15:30	平野真美
8	宮田篤＋笹萌恵 おはなしあそび 微分帖	2020/1/4(土) 13:30 – 15:30	宮田篤＋笹萌恵

出品作家4組のリレートーク

Nadegata Instant Party、松本和子、平野真美、宮田篤＋笹萌恵

コーディネーター：鳥羽都子(岐阜県美術館)

鳥羽 3本あるリニューアル特別展のうちの一つが、このセカンド・フラッシュ展です。美術館が改修休館中の1年間に、岐阜県のいろんなところに出かけて行ったプロジェクトやアーティスト・イン・レジデンスの記録であり、また、作家たちの新たな表現・挑戦の場ともなっています。これらを通して、今の美術館、そしてこれからの美術館が進んでいく方向性、それからアートの新しいあり方や多様性を感じていただけたらと思っています。

まず、タイトルですが、紅茶好きな方なら聞いたことがあるかもしれません。セカンド・フラッシュは「2番目に収穫した茶葉」という意味です。若々しい香りが魅力のファースト・フラッシュから、さらに旨味も増して芳醇になるとされ、「最高の味だ」と言う方もいらっしゃいます。新たに取り組んだフレッシュな活動が、美術館という“美の殿堂”に戻ってきて、いかに熟成され共有されていくのか、味わってほしいという願いを込めてこのタイトルをつけました。ちなみに、昨夜、日比野館長が、会場入口に、急速インスタレーションを作りました。4組の作家それぞれの素材やカケラが集まって、皆さんをお迎えしています。

休館中の出来事を追体験していただけるメイキング「ファースト・フラッシュ」のコーナーです。まず1杯目。岐阜盲学校では、平野真美さんが滞在制作を行いました。平野さんが点字の練習をした道具や子どもたちが作った「内臓」の写真。今、この内臓は子どもたちと作家が共に作った《架空の生き物》のなかで息づいています。2杯目、お向かいの岐阜県図書館で、宮田篤さん・笹萌恵さんが滞在制作をされました。そのときのイメージスケッチやto doリストです。これを見ると、当時の状況が伝わってきますし、作家がどのようにアイデアを実体化させていくのかということも感じられます。3杯目、岐阜市に隣接する北方町に、磯崎新アトリエが設計をした生涯学習センターきらりという素敵な建築があります。そこの一室で、松本和子さんが滞在制作をし、大きなフレスコ画を描きました。フレスコ画に使う漆喰は、お菓子等の袋に入っ

ている乾燥剤や学校の運動場に白いラインを引く、あの消石灰が原料ですが、岐阜県は、消石灰の産出量がすごく多い。岐阜県産の消石灰と砂利の実物や、使った道具が順に並べてあります。美術館の展示にあたり、作家にとって新しい表現に取り組んでいます。4杯目、岐阜県南西部の養老公園で、ナデガタインスタントパーティが、ちょうど1年前に制作をしました。荒川修作とマドリン・ギンズの《養老天命反転地》にインスピレーションを得た、非常に大きな作品で、難解なアートワークをたいへんうまく彼なりに解釈しました。では、作家自身から作品のお話をさせていただきます。ナデガタインスタントパーティの中崎透さん、山城大督さん、野田智子さんの3人です。



山城 みなさん、こんにちは。

中崎 ナデガタインスタントパーティは、中崎・山城の個人でも作家活動をしている2人と、アートマネジメントの仕事をしている野田の3人のグループです。僕はもともと美大の油絵科出身で、アナログパートの制作を担当して、山城くんは映像とかデジタルパートの担当をしてて。

山城 僕は岐阜に縁があって、大垣市に3年ほど住みました。情報科学芸術大学院大学、IAMASという、岐阜県立のメディアアートの学校に行ってたんです。

中崎 そして、野田さんは関市出身。野田さんは、演劇や映画という制作に近いポジション。

ユニット名の由来は、山登りの「パーティ」って仲間とかコミュニティを指す言葉があるんですけど、即興的(イン

スタント)なイベント(パーティ)を通して、即興的なパーティ(コミュニティ)が作られていく過程を作品に取り込む活動体でありたいと命名しました。「ナデガタ」というのは、ガチガチの怒り肩よりも、一見ゆるやかに取り込んでいく、という作り方をしています。

山城 このプロジェクトは、岐阜県美術館初の館外アートプロジェクトとして企画されました。美術館にとってもナデガタにとっても、非常にチャレンジングな企画でした。養老公園を舞台に実施するというのは僕たちが依頼を受けた時には決まっていたよね。養老は、紅葉や滝をみたり、お肉を食べに行ったり、風光明媚な観光地として有名です。でも僕たちアーティストにとっては、それより何より重要なスポットがある。そう、アーティストの荒川修作さんと詩人のマドリン・ギンズさんが作った《養老天命反転地》。

中崎 20歳くらいの時に、小雨降る中に行った。ツルツルして、恐ろしい場所だった…。

山城 僕も、15年くらい前に行きました。「見る人を挑発するような特異な施設をつくる岐阜県は文化に対して寛容な場所だなあ」と思った。みなさんは行ったことがありますか？ 反転地は必ず自分の身体で体験しなければならない場所。最近は、インスタ映えの効果もあって、来場者が増えているらしい。

中崎 そう、みなさんぜひ。いい感じで色が落ちて新たな趣で。…なんで僕は養老公園の宣伝を(笑)。

山城 で、「養老の滝付近で居酒屋『養老乃瀧』をやろう」とかアイデアを出しながら、ひょうたん型の窪地、調整池という場所を見つけました。

中崎 オフィシャルな場所というより、養老天命反転地にグルッと囲まれたデッドスペース…。

山城 そうそう、でかい公園の場合、雨を貯める場所が必要らしいです。調べてみると、これまでほとんど使われたことがないとのことで、そういう場所でやるのはおもしろいんじゃないかと。

中崎 水没とかもかなり心配したけど、大雨が降っても5センチ位溜まるだけという話で、いけるなど。

山城 養老天命反転地の横で、荒川修作さんとその活動、そして広大な敷地に真っ向から向き合うように作った作品が《Parking Promenade》です。

中崎 美術家って、野外って嫌なんですよ。台風対策しなきゃとか壁もないとか。だからプレハブ小屋がいっぱいあったらいい、でも予算もなく、建築ってたいへんだという壁に当たった時に、建築家の武藤隆さんが、「車がいいんじゃない」って！

山城 車輪があるから移動できる、つまり建築物扱いにならない。車がそのまま展示室として機能するんじゃないかって、アドバイスしてくれました。

中崎 車がたくさん停まっているパーキングのイメージと公園が繋がって行って。駐車場だけ公園をエンジョイするみたいな。遊歩道をたどるイメージとか、いろんなものが重なって、こういうタイトルになっていきました。

山城 18の「Practical Training」をつくりました。この指示に従って体験すれば、自分の身体と出会い直せます。例えば、トラックの荷台に石を並べて寝転がってイメージしてみるとか。

中崎 そのリードテキストを、荒川修作さんのオーラルヒストリーっていうインターネットにあがっているインタビューの言葉をもとにさせてもらっています。そこからインスピレーションをもらって、リンクしてくるような指示を(出して)、観る人は実践してみる。

山城 軽自動車とかバンとかトラックとかいろいろな車があったんですけど、例えば、「トラックの荷台を登って」は、傾斜台を上るという荒川さんの作品「傾斜台」シリーズ(1987～1990)があって、それを参照作品として使っている。このプロジェクトを通して、荒川さんの活動について随分調べました。人間は、生まれてから、身体のサイズやモジュール、それらを使うときのモラルや常識がセットになって生活しています。死を頂点として老化するわけですけど、反転地はその名の通り、常識を壊して天命を反転させる装置。

中崎 西洋的な絵画のパースペクティブ・垂直水平みたいな空間認識は、実は理論上の話で、(人間の視野には)不可能。でも建物がそう出来ているなかで、あの反転地は、三半規管のアンテナをピンピンに張りながら身体を使って今まで眠らせていた感覚を復活させていくトレーニングの場所だなと思った。それが養老公園はあまり多く語られていないので、かみ砕いて、ちょっと違う再体験をしてとっかかりを作って、(反転地と僕らの作品を)セッ

トにして観られるといいなあと。副題を「Human Driving School」として、自分たちの体をうまく運転するための教室所になればいいというプロジェクト。

山城 養老公園という、美術館じゃない場所でやったので、紅葉シーズンのお客さんがたくさん来たんですよ。その人たちにも直感的に楽しんでもらえるようにアトラクション方式にしました。気が付けば、最後は、荒川さんの「NOT TO DIE」という言葉と、それにまつわる言葉遊びで終わる構成になっています。

中崎 僕たちが書いたエッセイもあって、すごいテキスト量の作品で、去年まとめたカタログがここに(展示として)あるので、お時間あるときに一。

山城 今回、このプロジェクトを実現してもらった鳥羽さん、岐阜県美術館、養老公園のみなさん、養老町の地元のみなさん、Made in YOROの安田さん、本当にありがとうございました。

鳥羽 養老町の自動車会社の社長さんや岐阜ダイハツ販売さんも協力してくださいましたね。今日は、爆笑CMを作ってくださったケーブルテレビの泉さんも、運営課題を支援してくれた当時の総務課長も来ているし、マルシェに参加したシェアキッチンの方も多目的ホールでお店を出しています。

山城 館の外に出ることで出会いがたくさん生まれたプロジェクトだなと思います。



鳥羽 松本和子さんは、北方町でホームステイをしながら、滞在制作をされました。

松本 私は、フレスコ画という技法で制作をしています。日本ではあまり馴染みがないんですけども、ファースト・フラッシュのところで道具を紹介しているように、鏝で漆喰を左官しながらそれが乾かないうちに顔料で描いてい

きます。手前に吊るしているのは、もともとパネルに描いた漆喰の表面を、ストラップという昔からある保存修復の技法で膠で剥がしとって布に移したものの。(パネルのほうは)一日ずつ不定形に描いて繋げていっているんで、よく見ると、漆喰の継ぎ目があります。

公開制作をここまで大々的にしたことはなかったので、地域にゆかりのあるものを描きたくて、根尾谷の淡墨桜や滞在先のお家の家具など実際に有る物を取り入れて、それと従来の自分のモチーフの部屋を組み合わせ、室内外の空間が入り混じる景色を描きました。最初の鳥羽さんの説明のように、岐阜は消石灰が取れる土地。2017年にAAIC¹というキューブの展示が美術館であったときに石灰の業者さんを紹介してもらって、今回、砂と消石灰をご提供いただきました。それがパネルに載っているんで、とても重たい作品です。ふだん使っている材料とは違うテクスチャーや色が出ました。個人ではこの作品はできなくて、スタッフさん、ボランティアの方、会場にきた子どもに手伝っていただいたので、ところどころ色合いが違うのも、予想を超えた制作でした。

鳥羽 中崎さん、パネルをじっくりご覧になってますが、油画のご出身としていかがですか？

中崎 かなり特殊な技法なので気になって。この(平滑な)面に描いているのがいわゆるスタンダートなフレスコ？ で、ここ(その下の灰色の層)は、板に定着するために粗い…

松本 そうです。漆喰は消石灰と砂と水を混ぜただけで(粗い下地に)ひっかかるように(固まって定着する)。で、漆喰に色を載せて。

中崎 寒冷紗を貼って漆喰を塗りました？

松本 いえ、1か月半かけて描き終わった半年後に、寒冷紗を膠で貼り付けて、ベリッと剥がして…。

中崎 あ、もう1回、転写用に使った寒冷紗をはがして？

松本 そうですね。寒冷紗のさらに裏から目の細かいオーガンジーを耐水性の接着剤と漆喰を混ぜて定着。寒冷紗と膠は仮貼りしていた感じ。膠はお湯で溶けるので最後にジャブジャブ洗い流して。今(オーガンジー側で)抜け落ちているのは、うまく定着せずに一緒に流れてしまった部分。けっこう暴力的な…。

中崎 普段からこういう制作方法を？

松本 ストラップはしてたんですけど、ここまで大きい

のと、こういう風に余白を作って残すのと、タピスリー型に垂らすのは、初めて。

中崎 こっちとこっち(パネルと布)は組作品？ 版と版画を一緒に展示するみたいな感じですか？

松本 うーん、版とはちょっと違う。どっちがオリジナルかは(まだ自分でも)分かりにくいかな。

中崎 ありがとうございます。

鳥羽 対談ありがとうございました。松本さんは、窓から吹き抜ける風や空気、人が居た気配などの室内情景を描いている作家さんです。この展示では、空間構成にも挑戦され、タピスリーが空調の僅かな風によって揺らいたり、透明な部分から向こう側が見えたりするのも松本さんのテーマと重なっているように思います。



鳥羽 平野真美さんは、《蘇生するユニコーン》の制作をライフワークとしています。

平野 どうぞ中へ。AAICというコンペティションで初めて岐阜県美術館で展示したのですが、ユニコーンはだいぶ様変わりしていて、骨格以外は全て変えています。私は、ポケモン世代なのもあって、架空の生き物が大好きです。子どもの頃、たまごっち、ポストペット、ファービーなど架空の生き物が身近にいて友達のように遊んでいて、今はそんな感覚では遊べなくなっていて。それは、架空の生き物は本当にはいないと分かってきて大人になっているからで、だとしたら、私が実在を信じられないから殺しちゃったのかなと考えていたときに、象徴として瀕死(びんし)の状態で横たわっているユニコーンのイメージが頭に浮かんで。もし、ユニコーンを実在させて血を巡らせて息をさせて蘇らせることができれば、私が失くしたかもしれない、純粋さとか希望とかそういうものを蘇らせられるんじゃないかと、作り続けています。《蘇生するユニコーン》をライ

フワークとしているのは、さっき、ナデガタさんが「死なない」話をしていましたが、私は、作り続けている限り、ユニコーンは死ぬことがないと思っていて。肺に空気が送られているんですけど、作り終えてしまうと肺の素材も劣化して息ができなくなってしまう。完成したらどんどん劣化して、モノとしての寿命が決まってしまうんじゃないかと。AAICの時から骨以外を作り続けているのも、新しく作り変えるそのたびに自分の技術力が上がって、実在感を増していることを続けていけば、ユニコーンは死なないんじゃないかと思って、作り続けています。

岐阜盲学校での滞在制作の話をつづき、岐阜県美術館さんからいただいた時には、私は、岐阜市在住なんですけど、盲学校がどこにあるかも知らず、視覚障がい(視覚障害)の知識もあいまいで。制作に他者が介在することも初めてで。それで、滞りが始まるまでに盲学校に何回も行きたいと思って、初めて行ったのが2018年の1月31日でした。その時、陶芸作品の、ニョロニョロのついた白い丸いもの、ニョロニョロのついた茶色い丸いものがあった。先生に聞くと、それは全盲の子の「太陽」なんですね。その子たちが思う太陽は、図鑑の説明にある、星としての太陽。校庭に出た時のあたたかい日差しの太陽。それは、私たちが思う平面の太陽よりよく捉えられている。「あ、今回の滞在制作でできることは何もないかもしれない」と思って。だって、生徒のほうが作家として優れているかもしれないし。生徒ではなく作家として付き合っていかなければならない。その子たちが作家として何を考えているか知りたいし、私の作品を捉えて何が出てくるか興味があった。それで、滞在制作ではまず私のユニコーンを触ってもらって、その感想を言葉や絵にして作品としてもう1段階発展させてくださいという授業をしました。みんなの作品を、私は、キュレーターのような立場で美術館に持ってきた。それがこの壁3面の作品です。盲学校の子たちは、みんなが全盲なわけではなくて、だいたいの子は弱視。見え方はそれぞれで、小さな円くらいの(視野の)子もいれば、全体がボヤッと見えてしまう子もいて。

このあたりは、見たままユニコーンのかたちを捉えている。これは触ったときの毛の感じでユニコーンの体のアウトラインを描いている。この子は怖(こ)がって角を触らなかつたからこの絵には角がなくて、足や体のかたちをゆっく

描いてくれた。これは馬のかたちに描いていくのではなくて、触った部分、角とか目とか内臓とか印象に残っているところを解体しながら描いていく。これは角の印象が強かったのだと思います。それと、血管のチューブをギュッと触るとドクドクする感じを粒々で表してくれた。私は、目が見えているようでどれくらいものを見ていなかったというのがよく分かってきました。

盲学校の滞在からもう1年経って、その子たちを思いながら、新しく作品を作りました。滞在からしばらく経った頃、リルケという詩人の「これ《蘇生するユニコーン》のことじゃん」という一角獣についての詩を見つけて。それが盲学校の子たちのことと言っているなと思って、その詩に、私と盲学校の子たちを結び付けてもらおうと、その詩を点字にして、その中にユニコーンの血が通ると、見えたり読めたりするタピスリー。盲学校の子たちと作った架空の生き物とユニコーンを通して循環していくタピスリーです。
鳥羽 ありがとうございます。平野さんの展示エリア入口にあるリルケの詩も、ぜひ読んでみてください。展示室出口は、当時、作家さんがどのように場と関わっていたかを追体験していただけるコーナーです。



宮田 みなさん、お疲れさまです。椅子があります、どうぞ座って。

笹 手に取って読みながら聞いていただくと良いかもなので、ググっとお入りください。

宮田 はじめまして、宮田篤です。1984年、愛知県一宮市生まれで、子どもの頃はこのあたりによく来ていました。僕が主に仕組みや仕掛けをつくっていて、笹がおもしろくする担当で、2人でやっています。ここでは《微分帖》というお話をつくる遊びの仕組みを展示しています。

笹 笹萌恵です。《微分帖》は、2人以上でつくるお話で

す。1人目が、半分に折った紙の4ページにお話を書きます。次の人は、間に紙をはさんで、真ん中が繋がるようにします。ちょっとだけ、お話が膨らんで詳しくなったり、よじれてへんになったりという遊びをやっています。

宮田 どこがおもしろいかというと、ただ、「紙を折って重ねた」だけ！ミニマルな構造なんですけど、順番をつけて筆者を変えていだけで、面と向かって話すだけではわからない相手との関わり方が生まれていくのが、毎度毎度おもしろいなともう10年くらい続けています。8月は、お隣の県図書館2階の展示室で1か月間やっていました。その時は、自習スペースのある制作場所みたいな感じで、図書館に本を借りに来た人がフラッと関われる場所にしようと思っていました。

笹 実際どんな活動をしていたかというと、微分帖遊びと、2つ新しい試みをしました。いつもだと集まったみんなと空間を共有しながらお話を作っているんですけど、一つは、「お手紙スタイル」。知らない誰かが間を入れる。あと、「育てる微分帖」といって、一つの《微分帖》をテーブルの上に置いておいて、じっくり育てるというのをやりました。
宮田 図書館でできた200冊くらいをお手に取って読めるようになっています。

笹 場所が図書館だったので、自習とか本を借りに来た人が、ちょっと入ったらへんなことやっているな、出くわしちゃったというのがおもしろかった。

宮田 8月の滞在中に、福島県猪苗代町の「はじまりの美術館」でも展覧会をしてて、福島県でお話のはじまりを書いて、岐阜の人がお返事を書いて戻しますよ、という企画をやっていました。それも展示しています。ワークショップってその場でやりとりして完成までもっていかないと楽しくないのかなと思っていたのですが、そうじゃなくて、誰かから届いたのをゆっくり優しく返してあげる、分割して保留する仕組みも魅力あるんだなと8月の滞在で分かったんです。なので、今回、「ペンびぶんフレンドクラブセンターぎふ」を開設しました。

笹 手前側が「ぎ」、奥が「ふ」。2か所で違う機能をもたせました。「ペンびぶんフレンドクラブセンター〔ぎ〕」で1枚目を書いてポストに入れると、翌日「ペンびぶんフレンドクラブセンター〔ふ〕」に届きます。好きなのを1枚とって間にお話を入れてまたポストに入れると、「ペンびぶん

フレンドクラブセンター〔ぎ〕」の壁に飾られます。その循環で運営しています。

宮田 それが繰り返されるとこの場が魅力的になるだろうという願いを込めて、今日、ここに開設しました。すでにポストにはかなり溜まっています。ちょうど、ここ（展示中央部の小径）は長良川。岐阜の町に思いを寄せて、今度本当に、川南と川北でやったらどうかと考えている。**笹** あとそうだ！「びぶんのぺんぱる」もあって、『微分帖』を10年くらいやっていたなかで出会った方や、8月の滞在で会った岐阜の方に、びぶんのペンパルさんになっていただいて、皆さんがかいた1枚目が、たまーに全国のどこかにいるペンパルさんに届いて、また戻してくれるのもおまけ的な感じでやっています。

鳥羽 搬入期間中、宮田さん笹さんが準備や設営をしていくのを日々見ていると、美術館がリニューアルに向けていろいろ運び込んだり職員が増えたりしていたのと合わせて、美術館がまた生き返っていくようで、また、セカンド・フラッシュ展に息を吹き込んでくれているようでとてもうれしかったです。ぜひ、みなさんも「ペンびぶんフレンドクラブセンターぎふ」に参加してみてください。

最後に作家さんから一言ずつ。ナデガタさんは、プロジェクト型の作品をいかに美術館に定着させるかという課題を『アートプロジェクトの悩み』³の対談でも、今年の館長とのトークでもおっしゃっていたので、やってみていただきたいなと思っていて。大きな作品をいかに凝縮するかが難しいと思っていたんですが、見事に、実力を発揮してくれたなと思います。

中崎 僕らの《Parking Promenade》もかなり体を使うアクティブなもので、ある種いい意味でノイズでもあったんですけど、あの広さで散漫になっていたのが美術館で情報がギュッと詰まって、もしかしてここで見たほうが話が早いんじゃないかなと設置しながら思うところもあったので、養老で見た方も初めての方も改めてもう1度見返していただければ。

山城 今、岐阜県美術館だけでなく、全国で美術館リニューラルラッシュで、美術館と社会の関わりを問われている時代です。休館中、活動が外へと広がって、今改めて4組の作家をみて、1年間の取り組みとしておもしろい。これからも外へと、美術館と社会をつなげていく役割が

広がっていくといいなと思いました。

鳥羽 リニューアルで、展示室の壁をグレー系の白にして、照明も変えたんですけど、松本さんの作品は、美術館の新しい特性を活かし、「作品を美しく顕在化させる」という美術館の存在意義を体現していただいているなととてもうれしく拝見しました。

松本 私だけでなく、他の作家さんも、違う場所に出張して、コミュニケーションや、やり取りが広がったのをさらに美術館で展開するという、一段階あるのがいいと思いました。私の作品も、壁画としては一度完成するけれど、ここで改めて展示することで、照明や空間との関わりがリンクしつつさらに見え方が変わるのがおもしろかったです。《いぶきがきらり》というタイトルが、伊吹山が見える場所で制作したのと、私自身、生後半年の子どもをいろんな人に見てもらいながら制作できたというのがあって、今、たくさんのお子さんが楽しそうにいろんな展示に参加されているのをみて、美術のあり方が広がっているというのを感じられてよかったです。

鳥羽 平野真美さんは、AiMを通じて、どんどん考えを深め、制作を展開していった。美術館で新作を発表していただけるということは、自分でも意外なほど、こんなにじんわりと新鮮にうれしいことなんだなと思いました。ぎりぎり最後まで粘って制作されていましたよね。

平野 全然プラン決まらなくて…。地元でこういった機会をいただけたということ、盲学校という普段関わる機会がないところとご縁をいただけたことをうれしく思っています。「視力」が変わった今、発表できてよかったです。

鳥羽 ありがとうございます。では締めを…。

宮田 美術は、サード・フラッシュ、フォース・フラッシュと、どれだけ煎じても味わいが変わっていくのではないかとと思うので、長良川を舞台にして「ペンびぶんフレンドクラブセンターぎふ」をまたやりたいなと思っています。

鳥羽 引き続き、リニューラルオープン初日の美術館をお楽しみください。ありがとうございました！

註 1. Art Award IN THE CUBE 2017。松本と平野は、790人の応募者から入選した15名のうちの1人
2. 19ページに掲載
3. 小川希編著『アートプロジェクトの悩み―現場のプロたちはいつも何に直面しているのか』フィルムアート社、2016

カジュアルトーク 再会！松本和子×北方町の方々

坂田勝臣（北方町在住）、杉山正彦（岐阜県美術館サポーター）、長縄等（ホストファミリー）
コーディネーター：鳥羽都子

鳥羽 それでは、ご紹介します。フレスコ画家の松本和子さん、松本さんが滞在したお宅の長縄等さん、美術館サポーターの杉山正彦さん、制作を最も多く見に訪れたうちの一人、北方町の坂田勝臣さんです。



右から松本、長縄、杉山、坂田

滞在制作の実現にむけて

松本 磯崎新さんが設計された北方町生涯学習センターきらりで、9メートルのフレスコ画をどのように制作したかをご紹介します。

杉山 美術館が休館中にアーティストが活動する場所¹を探していると知り、「北方町でしませんか？」と名乗り出ました。美術館では作品を見るだけで、作家さんの制作活動を知らなかったものですから、絶好のチャンスだと。その時点では施設を使えるか分からなかったんですけど。よく行政は、「前例がないから」と言うけれど、私が住んでいる北方町は、「お金は出さないけれど、とにかく提案してください」なんです。それで美術館と繋ぎました。

松本 学芸員さんに、最初に、「公共交通機関があまりないけど、いい？」と確認されて。

杉山 どんな山奥に連れて行かれるかと不安をもたれたらしい。北方町は県下一狭い町ですけど、美術館から車で15分という絶好の距離感で。

松本 制作場所として丁度よい、とてもきれいな、でも

ふだんは使われていないもったいないスペース。それを、準備から約2か月居て、作品を飾ったまま京都に戻り、秋に再開させてもらった。半年間という長期のスパンで懐深く受け入れていただき、ありがたい。

宿泊については、けっこう探して…。

長縄 食事しているときに、「宿を探している」という文化協会の広報をたまたま見て、おもしろいな、流れていく生活サイクルの刺激になればと思った。半年経って、よくよく考えてみれば、全然お客さん扱いせずに、フランクに行き来したり食事したり、有意義な時間だった。

松本 長縄さんご自身も精神的に制作されていて。最初は、そのアトリエの屋根裏に住めばいいかなと。

長縄 それはちょっとかわいそうだなと思ひまして。

松本 弟君（中学1年生、長縄家の次男）が「僕の部屋を使っていよいよ」と言ってくださったんです。長縄さんは絵画教室もされていて、この会場にも教室の方がいらっしゃる。坂田さんも、春の滞在制作の時に長縄さんと会われたのがきっかけで教室に通われるようになったとお聞きしています。長縄さんとは、「松ちゃんは、今はいいかもしれないけれどさ、今後どうするの？」みたいな美術の話を夜な夜なしていましたね。

長縄 そうですね。僕も少し絵に携わっているので、話がとても膨らんだ。

松本 「今どういう状態か」とたまに見に来られて。「え、終わらないんじゃないの？」と言い出したのは長縄さん。帰るたびにすごい心配をされて。今、会場で見えちゃる奥さんの京子さんも、華道や茶道をやっていて、楽しく見て下さっているなど温かく感じながらー。長縄さんのお家の家具やロッキングチェアも作品のモチーフにしました。

つながる、ひろがる、続く制作

松本 私は、砂と水を混ぜた消石灰―漆喰を鏝^{こて}でパネ

ルに左官して塗り、そこに顔料で描く制作をしています。

消石灰って、土壤改良や校庭のライン引きに使われるもので、岐阜、特に金生山^{きんしょうざん}で産出される。キューブ(42ページ註1)の時に、マルアイ石灰工業(大垣市)さんとお話する機会があり、今回、「砂と消石灰を頂けませんか」とお願いしたら、「取りに来てください」と。なかなか入ることはない、映画のような、ゴウンゴウンと音がしている山の上の掘削現場「昼飯工場^{ひるい}」に取りに行きました。ずっと大垣に住んでいる方は、ちょっとずつ山が削られて「だいぶ昔より小さくなったなあ」と分かるらしいです。太古からの宝物ですね、ありがたく使わせていただきました。砂は150キロ、消石灰は80キロを2種類、ドサッともらいました。社長さんが岐阜の加納高校という美術科のある高校の出身で、美術で使われるなら、と。

美術館の職員さんは午前午後交代で毎日一人以上、心温かく一緒に作業をしてくれて。なかなかこの規模になると、独りで制作するのは難しく、体力的にも消耗するので、誰かいてくださると励まされる。(作業を手伝った)人によって消石灰の割合で色ムラがあるのも、意図しないおもしろさで「下地の段階でも十分作品だなあ」と満足感を得ながら帰ったんですけど。まあ、これで終わるわけにもいかず、一応、次の週も続きました。京都に一旦帰る日、パネル1枚10キロくらいを縦に3枚架けるんです。このとき、奇跡的なタイミングで杉山さんと、もう一人、美術館のサポーターさんが来られて。「しめた!」って手伝ってもらいました。かなりの重労働でした。

2週目からは夫と当時4か月の息子も来て家族で滞在しながら、そこから2週間くらい制作。漆喰は、塗った時は灰色で乾くと真っ白になるので、その日の湿度や気温で色の出方が変わるのもフレスコ特有。パズルを繋ぎ合わせるように絵ができるのですけれど、1日の半分くらい、昼過ぎまでは漆喰を塗る。午前中に来た人が、「まだ絵を描かへんの? じゃあごはん食べてから来るわ」と。で、もう1回来て「あれ、まだ?」、「スミマセン」みたいな。でも、やり直しは効かないので、自分の中で納得いくように、どういうかたちで継ぎ目を次につなげていくかを考えながら漆喰を塗る。色を塗るのは夕方6時位まで1日仕事でやっています。

坂田さんはよく散歩ついでに来て、前に見た時と比べて、

あの色はこう変わったんだなあとか。お友達も連れて来てくれた。きらりの前のお地藏さんに寄ってからの制作見学は、近所の方のお散歩コースになっていましたね。

坂田 塗ったときは色が鈍い。でも乾燥するときれいになる。それを不思議だなあと、日を改めて来るのは楽しかった。ただ、塗り残しがたくさんあったもんで、どうするのかなあと心配しながら。僕らアマチュアですから、どのあたりまで残してよかったのかは全然わからず、見とっておもしろいです。

松本 本当にどこまで塗り残すのか「これはここまでのかたちだな」と考えながら。カーテンや布越しに見た部屋の光景を中心に描いているので、そのドレープや襖^{ひだ}のかたちをイメージしながら、毎日漆喰の継ぎ目を決めていて。全部描いてしまうと、「こういう絵ですよ!」という説明で終わってしまうので、広がる余白を残した初の作品。それまでは、パネルの端まで漆喰を塗って全部描いていたのですけれど、今回、岐阜で(砂と漆喰を)頂いたのもあって、下地を見せたくて。下地の線と漆喰の絵が絡み合い、入れ子になる。そのあと剥がすことも決めていたので予定調和じゃないのをやってみたくて。見学者は、椅子をそれぞれ好きなところに置いて、「人があそこいる」「女の人のリボンだ、後姿だ」とか。私は、人は描いていないんで、「え、どれがですか?」とか言いながら。



絵が好きな方、素材に詳しい方、大学の先生などが集まってきた

北方町議会の議長さんが美術をやっていらっしゃる方で、私が「毎日長縄さん宅の弟君のご飯を料理しています」と言ったら、息子さんが農業を始めたからとおいしいトマトをドサッとくれて。で、持って帰ったら弟君がトマト嫌いだった(会場笑)。でもパスタソースにしたらおいしく食べてくれました。坂田さんは、子どもを見て、「じゃあ、こ



町議会議長からの差し入れのトマト りんごも鉛も差し入れ

れからモレラ(ショッピングセンター)行くわ」って、帰ってきたらこのバグのぬいぐるみをくれて。子どもはとても気に入って、今でも、恋人のようにきゅっと抱きしめてます。裏の団地に住んでいる近所の子は、何回か来てくれて、漆喰を泥んこ遊びみたいに楽しんでこねたり。パネルの一番左端は、その子がどうしても塗りたいと言って、「じゃあもう一緒に塗るか」と、絵の話もちろんですけど、その子の好きなものの話をしながら…。後から「ちょっとこのかたち甘かったかな?」と思ったり。でもいい思い出です。

プロジェクターでまた漆喰の上から下描きを投影しながら色をつけた。影と光ができると、子どもは喜ぶので、一緒に影絵を作って遊びながら制作をしました。

杉山 なにげなしに言われたのですが、当然下絵があると思っていたんです。ある日、プロジェクターがあり、「下絵は長縄さんちで描いてきた」とさっさと言われて。私たちにとっては「え?!」って、すごく新鮮な驚きでした。

松本 昔はお弟子さんが下描きをして師匠は仕上げだけ。今はお手伝いをプロジェクターにやってもらえる便利な世の中になりました。



制作現場からみえる夕映え

杉山 これは、制作現場から見える伊吹山ですよ。夕方の景色がなかなかいいところ。

松本 「ここから伊吹山が見えるよ」と坂田さんが教えてくれて。この建物は、色合いも伊吹山をイメージし、黄土色の化粧壁、奥のホールは土の色をイメージしているそうでとても有機的なかたちです。それもあって、やっぱり土の色を出していこうと。《いぶきがきらり》というタイトルも、子どもが産まれる前に滞在制作が決まって、子どもを産んで成長を感じながら制作し、「息吹/伊吹」と「キラリ/きらり」を組みあわせ、「いぶきがきらり」。公開制作が進むにつれ、「剥がすんですよ」と言うと、怪訝な顔をされ、きらりの所長にも「このままでいいんじゃない?」と言われながらも。ストラップ²って、実は、いろんな条件で失敗することもある。でも、やると決めたらやる。漆喰は時間が経てば経つほど強固なものになるので半年間自然乾燥させ、9月に改めて膠で寒冷紗をパネルに貼り付ける制作をしに戻ってきた。秋は公開していないんですけど、坂田さんが「気配がする」と気付かれて見に来れたんですよ。坂田さん以外にも春にお会いしたお客様も来られて。

坂田 何のために、どうやっているのかと。手伝っている職員さんと松本さんと手つきが全然違う。腕の差がかなりですね。ストラップすると色が吸い取られてずいぶん印象が変わりましたね。(美術館では)陳列の仕方もいいなあ、色が落ちたパネルも作品になっているなと感激しました。

松本 剥がすまでは分からないので、偶然性に任せているところもある。ビリビリっと絵の表面の層だけを寒冷紗ごと剥がして、次は、裏側からオーガンジーを重ねて裏打ちをし、建築用の接着剤と混ぜて裏から塗って定着をさせる。パネルは今は剥がされて幾分か淡い色で存在している。

作品を実際に見られて、どういう風に感じましたか?

杉山 あの壁みたいなものが剥がした後どうなっているのかわかる。すごく楽しみにして来た。ふつうは、あの方法を含めて、松本さんとしゃべりながらの制作風景を知らないもので。(美術館の展示の方法で)すごく良かったのが、布が揺れて風みたい。全然違った印象を受けた。

長縄 転写する前の状態の時も、乳白色のきれいな色や風みたいな西洋っぽい雰囲気を描く人だなと思っていたが、剥がすことによって、より抽象的に風を感じた。

立っっぱいゆらぎ、あいまいな部分を表現したいのかな。

松本 ストラップは失敗することもある。しかも、今回は何人かで制作したので、膠ひとつにしても剥がれ具合が違う。「誰が接着剤を塗っても一緒」と思っていたのが違って、穴ぼこにはなったんですけど、それ越しにパネルがよく見えたり。

絵のモチーフに取り入れた淡墨桜を家族で観に行きました。枝振りとそれを支えている支柱も特徴的で、窓から見えているのと室内の枝と入り混じる光景を描きました。ふだんは想像した部屋のイメージを描くことが多いのですが、実際の特定の名前を持つものを描いてみて、意外と悪くないなと。(それまで描いてなかった)異質なことを受け入れられるかが課題だったけど、公開制作という点で、会話のきっかけや見る人のヒントになるものを描きたいなと、で結局、分からないと言われることも新鮮で。今後、これだけの大きな作品を1人で描くことはさすがになかなかない。でも、その土地の色や場所との関わりとか、壁画制作は、引き続きやっていきたいと思っています。

“産後レジデンス”を“岐阜発モデル”に

鳥羽 今日は、元気に健やかに育ったお子さん、ご主人やご家族の方も応援に来ていて。1年半ぐらい前には、「鳥羽さん、相談があるんです」と…。

松本 下見の日に言いましたね。「実はわたし赤ちゃんできました」って。

鳥羽 松本さんは、「出産を機に作家を辞める人が多いけれど、続けられることを後輩に示したいんだ」と。美術館には女性が多く、いろいろ話し合っ、出産・育児は本当に何が起きるか分からないけれど、「やってみよう！最悪レジデンスできなければ、松本さんの過去作品を飾ろう!」と。女性が仕事を続けることも、作家であり続けることもたいへんな世の中で、ご自身も変化しながらやり遂げてくださった。

松本 私は美術の教科書編集の仕事もしていて、扉のページに「美術をやるみなさんへ」と日比野克彦さんの言葉が載っているので、館長とのスタジオトークでは、そんなビッグスター?と。長縄さんにも「松ちゃん、大丈

夫?」と言われながら(笑)。(トークでは)ヨーロッパでの滞在制作の起源や、美術館で作品を発表するだけでなく工程を見せることに対する意義や意識、ダンボールとフレスコの素材のスピード感の違いも再確認してハッとさせられましたし、加納高校の生徒も来ていて、彫刻科志望の子が、フレスコもいいかもと…。美大でも女性が増えているのですが、子育てをすると制作はあまりできないのが常識になっている。私は出産の後どう再開するかと思い悩んでいたところにレジデンスの話があったので、私自身も家族も、それに向けて待ち構えて。エイヤッと作るきっかけは重要だった。女性でもやりたいことをどんどんやっていけば、なんとかなる、やり方を工夫すればやれないことはないと伝わればよかったなと思います。

鳥羽 松本さんは「きらりは、光が燦々入り、広くてアトリエ向き」と言っていた。町民が常に出入りする施設ですし、今後も続けてもらえれば一。

杉山 (力強く)やりましょう!

鳥羽 では、最後に駆けつけた館長から。

日比野 過程を知っているからこそ、完成作品が愛おしく見えることがある。あの作品における一番の解説者は、現場にいて一緒につくった地域の人たち。語りたことはいっぱいあるでしょ? きらりという素敵な空間は、みなさんが集まれる場所。美術館という大きな箱に出入りするアーティストが、文化施設に出向いて生活をして作品を作っていくことが、いろんな人にいろんな美術の楽しみ方をしていただく、とても重要なそして有効な手段、新しくなった美術館の試みだと思っています。これからも、いろんな地域にレジデンスの動きが出てくると思います。ぜひ、北方町は先陣を切ったので、「あのあと、きらは活性化して独自文化を発信しているよね」となるように、自分たちでアーティストを迎え活動を充実してってもらえば、レジデンスした意義が北方町にとってよりいっそういいものになっていく。ありがとうございました。

註 1.美術館休館中に、それまで実習棟で行っていたアーティスト・イン・ミュージアムという公開制作型企画を館外で行うこととなったため。

2.フレスコの描画面を引き剥がす保存修復の技法

フレスコとは

14～16世紀イタリアのルネサンス期に芸術家たちによって最盛期を迎えた絵画技法で、レンガ壁などに漆喰を塗り、漆喰がまだFRESCO(新鮮)な状態、つまり未硬化の間に水で溶いた顔料で描いていく技法が一般的である。

《いぶきがきらり》の制作方法 1—フレスコ

1.準備

①本制作では、材料となる砂と消石灰を岐阜県大垣市のマルアイ石灰工業よりご提供いただいた。

②砂は篩にかけ、粗い下地用と、細かい上塗り用に分ける。作業量が多く、公開制作中には他の方に協力をいただいた。

③消石灰は一晩水に浸し、クリーム状にする。

④支持体となる木製パネルにアク止めを施し、粗い砂・消石灰・建築用の接着剤を混ぜて塗り、粗くゴツゴツとした下地をつくる。これに上塗りの漆喰が引っかかって固まる。

2.下書き

⑤フレスコはやり直しが効かないため、プロジェクターで下絵を映し出して線描きする。

3.漆喰作業と描画

⑥漆喰づくり:細かい砂と消石灰を1:1～2:1の割合でよく練りあわせる。気温や湿度、消石灰の状態によって割合を調整する。消石灰はアルカリ性なので手袋をする。

⑦漆喰塗り:漆喰を鏝で塗る。漆喰の状態が荒れないよう手早く、5mm程度の厚さで均一に。漆喰を塗る範囲は一日に描くことの出来る仕事量を考えて決める。最初にステンレスの鏝、次に漆喰の厚みを揃えるために木の鏝、最後に表面をステンレスの鏝で磨く。

⑧描画:漆喰の表面の水気がひいたら下絵を再び投影し、水溶性顔料で描画をする。描画時間は気温や湿度、漆喰の厚み等によって異なるが、本制作では5時間程度。フレスコでは、油絵の油脂や日本画の膠のような展色剤(接着剤)を用いないため、顔料の発色が活かされる。漆喰は乾燥する過程で、水分を放出しながら空気中の二酸化炭素を取り込むことで結晶化し、顔料は透明なガラス質の膜で包まれ漆喰に一体化し定着する。

《いぶきがきらり》の制作方法 2—ストラップ

①膠を4倍くらいに膨潤させる。寒冷紗を膠で漆喰の表面に貼り付け、1週間乾燥させる。

②寒冷紗を漆喰から引き剥がすと、1mmにも満たない表面の層のみを剥がすことができる。絵の面を裏側にして置き、裏面に残った漆喰や砂を取り除く。

③消石灰と建築用接着剤を1:1で混ぜ、裏面に塗る。さらにオーガンを重ねた上から建築用接着剤を塗り、乾燥させる。

④絵の表面にお湯をかけて膠を溶かし、寒冷紗を取り除く。これにより、漆喰の描画した層のみが残ることになる。



カジュアルトーク

Nadegata Instant Party × 平林恵^(横尾忠則現代美術館学芸員)、福井清治^(養老町立上多度小学校校長)

日比野克彦

コーディネーター：鳥羽都子



鳥羽 まず、日比野館長、2015年に始まったアートまるケットについて、なぜ企画したのかと、なぜナデガタインスタントパーティさんに白羽の矢を立てたのか、ご紹介を。

日比野 アートまるケットは、養老に行くまで、美術館の庭でやっていました。僕が美術館に呼んでいただいてから「展示室以外での展開を」と、ワークショップなど参加の仕掛けのあるアートプログラムを年1回やってきたもののタイトルが、アートまるケットです。岐阜の言葉で「何々にまみれる」って「まるけ」って言いますよね。それと「マーケット」を組み合わせた造語です。1回目から、IAMASと、たくみ・森林・園芸という岐阜県立の4つの教育機関と協力して展開したんですね。森林アカデミーは木のジャングルジムを、園芸アカデミーはそこに花をいれて、IAMASにはシステムやプログラムを、たくみには水車を作ってもらった。そんな中で、4回目を迎え、改修休館するので館外でやろう、そして招聘作家を呼ぼうというときに、それまでIAMASとやってきたので、繋がりのある作家がいいな

ということで、山城さんが卒業生ですし、地域を巻き込んでいくことではトップアーティストだし。今日のゲストの平林さんは養老天命反転地の学芸員でしだし、福井先生も岐阜県美におられて、いいタイミングで養老の小学校に校長で戻られて、ベストの布陣で臨むことができました。

中崎 平林さんに養老アートまるケットの記録集でテキストを書いてもらったご縁で、今日はディスカッションをすることになりました。そして、養老の会期中には、いろいろなイベントを美術館に開催していただいたんですけど、福井校長先生がいる養老の上多度小学校は、オープニングに全校生徒で来てアクトをしてくれたり、その前には生徒とCMを作ったりしました。僕らは2006年に結成して、僕は、文章を書いたりアナログ制作担当です。

野田 私はマネジメントを担当しています。岐阜県関市出身です。

山城 僕は映像やデジタルを担当しています。この辺りは、IAMAS在学中の10代最後に住んでいたエリアなの

で、帰ってくるとホッとします。

中崎 僕たちは、ナデガタインスタントパーティという名の通り、毎回即興的なパーティを開くのを「口実」にされていて、その「口実」によってコトが起こる過程自体が目的や結果になることを作品化しています。水戸美術館で実際の学芸員が役者を演じて、「ダ・ヴィンチ・コード」を50倍くらい薄めたサスペンス映画「学芸員Aの最後の仕事」を作るとか。今日は客席に新潟から、以前プロジェクトと一緒に作った“総務課さん”(あだ名)が来ていてちょっとびっくりしています…。

山城 僕らの作品は、人がたくさん関わるので、そのあたとも関係が続くことが多くて。新潟の「水と土の芸術祭2012」では、元保育園を会場に、陶芸の薪窯を作ったりして、茶碗を作っていた話を、自作自演でお遊戯会にした。それを《ONE CUP STORY》という展覧会にした。今も毎年「礎^{いしづえ}窯サポーターズ」のメンバーが窯焚きをしています。窯は、だいがボロボロになってきたけど、中は釉薬がびっしりついて、大事に残していかないとという気持ちになるプロジェクトに仕上がった。そして養老のプロジェクトに誘っていただいて。

中崎 美術館の庭で開催されていた第3回までのアートまるケットの資料を見せてもらったりしながら、たいへんなことに呼ばれてしまったぞ、と。野外ってたいへんだし、アーティストって、ぬくぬくと制作するのが好きなわけじゃないですか! 「会場は養老公園です」と言われて、最初は、巨大な公園の一番奥の養老の滝、芝生広場の斜面、養老ランドっていう遊園地とか、閉店したレストランもいいなといういろいろ見ていたんですけど、なんといっても、僕らアーティストとしてそれぞれ反転地への思いがあって。僕は、大学生だった1999年、青春18きっぷで旅行してて、大垣から行ったんですけど、休園日で。悔しくて、九州まで行った戻りに寄ったら、小雨で、おじいさんがスコーンって滑ってた。なんてアナーキーなんだと感動しました。

野田 美大1年生の夏、兄が「岐阜にすごい公園がある」と言って、両親を誘って岐阜県美術館のジョージ・シーガル展に寄ってから反転地に車を走らせ、家族でギャー言いながら楽しみました。写真を専攻していたので、買ったばかりの一眼レフで、反転地を出たところの坂で4人の写真を撮りました。思い出すと、胸がキュッとします。

山城 僕の思い出は、10代の頃、真冬の2月に養老の滝に打たれたという…「夢」です。(会場笑)

—

中崎 で、反転地の中はさすがに^{はばか}憚られると見ていくと、ちょうど、反転地に取り囲まれた窪地、存在しているのに存在していないみたいなデッドスペースが気になった。そこが、すごい雨が降った時に水を溜める調整池。ここで反転地を借景にできないかと。ちなみに、平林さん、ここでプロジェクトをやったりしたことは?

平林 荒川さんにも「ここは使えないの?」って聞かれたことがあるんですが、反転地の延長だと常設になりますよね。でも調整池の目的からして空き地におかなければならなかった。今回、「あ、期間限定なら使えるのか」と目からウロコだった。2005年に藤浩志さんの企画で、1日限り、誰でも出品できる展覧会をやったのですが、この場所を選んだ人はいなかった。だから、ここで展示したのは、たぶんナデガタさんが初めて。

中崎 プレハブの家が20個くらい建っていたらやりやすいなって言ったら、もちろんそんなお金はなくて、建築家の武藤隆さんから「車だったら手続きがいらない」とアイデアを貰い、車が連なって遊歩道になって、公園が現在進行形に動く、パーキングのイメージに繋がってきた。反転地とどう繋げるというときに、年配のアーティストたちの話が脱線しまくるインタビューを、オーラルヒストリーとして収集しているWeb(日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイブ)があって。荒川さんの作品集は何冊か持っているんですけど、だいたい難しくて、3ページくらい読んでそのままインテリアになるっていう感じだったんですけど(笑)、これは、真実かどうかは置いておいて、人柄が伝わるので、その言葉をかなり引用させてもらっている。

山城 このインタビュー、言葉をほとんど編集せずに荒川さんの話し方をそのまま残してくれているので、こういう人柄だったんだらうなっていうのが手に取るように分かるんです。

中崎 そのテキストから18ほど引用して、作品のベースにさせてもらった。1回だけ、荒川さんの特別講義を大学で聞いたことがあって、「私は死なない!」っていうのをずっと言ってて。僕らの体には何兆というバクテリアがいて、自分というものが死んでもバクテリアは変わらず生

活していくみたいな話をしていて、「確かに!」という思い
出もあって。車をひとつの展示室に見立てて、サブテキ
ストをつけてそれを体験するという作品になりました。

鳥羽 ここで、日比野が中座しますので、作品について
アートまるケットの発案者から感想を。

日比野 アートまるケットはいろんなことがひとつになっ
ているんです。ナデガタの作品は、あんなことあった、こ
んなことあったという、それぞれの自分ゴトとして出来事
や話題がたくさんあるんですね。場所の力を紡いでか
たちにするのがナデガタの魅力。いつか、ナデガタと関
係した日本全国の人たちが集合して、ナデガタを語り尽
くすみたいなことがここ岐阜県美術館でできるとおもし
ろい。何度噛んでも違う味が出てくるのがナデガタ。新
たな1ページをセカンド・フラッシュという展覧会で、岐阜
県美術館でできて光栄です。

—

中崎 反転地という空間は、全部を疑って三半規管を
更新しながらでないかとともに立ってられない。森や
海の動物として普通にもっていたものと呼び戻す装置。
それに近いものをわざとらしく解りやすい言葉をつけて、
反転地と補完関係になるとおもしろいあと意識しなが
ら作りました。

野田 あの公園で何やってもいいよ、と言われたときに、
無視できないのが反転地で、荒川修作へのオマージュ
作品になったという感じがしています。

平林 私は岐阜県美に非常勤職員として3年間勤めた
後、1995年10月の反転地オープン2か月前から学芸員
として10年間勤めました。最初の仕事はカタログ制作で、
当時の岐阜県美の館長だった平光明彦ひらこうさんに同行して
荒川さんに会い、インタビューさせてもらった。そして、荒
川さんの言葉が印象的だったから、それを拾って写真と
一緒に載せてはと提案したんです。なので、今回、ナデ
ガタさんが荒川さんの言葉をピックアップしてプロムナード
の各所に置くというのは、私の反転地に対する最初の
アプローチと同じでおもしろかった。

中崎 へえー、おもしろい!

平林 実際に話を聞いて、自分でテープ起こしをして、
何度も校正をして、さらに10年後の改訂版では英訳も
入れて、と、その言葉と長くつきあってきたので、今回ナ

デガタさんが引用したオーラルヒストリーは、荒川さんの
言葉と分かっているけれど、自分にとっては馴染みがなく
違和感があった。さらに、前後の脈絡が絶妙にスパッ
と切られているから、どんな背景で語られているか分か
らなくて、想像力が掻き立てられる。最後のビデオで、そ
の言葉が集約されるんだけど、語っている人も背景も全
く違うものになっていて、そこでやられたな、と…。荒川
さんのコンセプトが確実に含まれている箇所ではない、
微妙なところ(言葉)を拾っていて、それがナデガタさん
の活動にオーバーラップしながら、最終的にオリジナル
の作品になっている。オマージュって、コンセプトをなぞ
ることではなく、それを利用してオリジナルに着地させる
ことだと思うので、すごいいいオマージュだなと思いました。

中崎 おーうれしい。インタビューから切り取って前後
の文脈なしに繋げるのは、僕個人でやっていたのを、ナ
デガタでも使うようになった手法なんですけど、繋がるよ
うな繋がらないような、違う解釈が出てくる塩梅は意識
しながらやっていました。ではその最終シーンを流して
みますか。これ、声がいいんですね。美術館の(スタッ
フの)森竹さんがアナウンサーみたいな声で。

映像 …この身体は使いようによって、どんな風にでもなるんじや
ないか 一番いいのはね、動物のように、歩くことですよ。一番
小さなマッスルを使う 荷物は、これぐらいですよ 「新しい常
識を作らないといけないんだ」って言ったんだ 身体を中心に
してやってるんですよ 天から授かってるもんじゃなくて、全然
別なことしてるんだ 例えばそれを、言葉にできないわけ どれ
ぐらい我々の科学は、間違った世界に進んでしまったっていうこ
とを、泣きそうになって話してたんです 「泣いてるんだ」って言
うでしょ、赤ちゃん、生まれたての。あれは、ほとんどの赤ちゃん
はね、「1人にしてくれ」って言ってるの ……(以下略 13ペー
ジに全文掲載)

中崎 見ていると、だんだん頭がおかしくなっていく感じ
がしますね、これ。

[高所からの映像](制作中)たまたま新聞社の人が(取
材に来て)クレーンで撮影していたのを山城くんが「すみ
ません!乗せてください!」って(撮った映像を)差し込んだ。
[バッタの映像]いろんなことがぎりぎりで(追い込まれた)
山城くんが「僕は明日、虫を探しているから」ってずっと
言ってる、養老・虫って検索したら養老孟司しか出てこ

ない。でも、荒川さんと養老孟司が宮崎駿の本『虫眼と
アニメ』で関係があって。すぐにamazonで買って参考
にしたり。

中崎 [ブレーキの音と「私は死なない」の映像]「101
回目のプロポーズ」というドラマを知っている人、どれくら
いますか? そのラストシーンのパロディです。ヴェネチ
ア・ビエンナーレに出していたIAMAS出身の安野太郎と
いう音楽家に、オープン2、3日前に「チャゲアスの『SAY
YES』にすごく似ているけど著作権に引っかからない音楽
を」と頼みましたね。(会場笑)

山城 「ぼくは死にましゅーん」が「NOT TO DIE」なのか?
みたいな。

中崎 トラックがいっぱいあるとかが繋がって行って、最後
「YES」になるみたいな。実は、オノ・ヨーコにみせかけて、
山城くんのIAMAS時代の1年生の時に、「YES」って書かれ
た板の作品があって、そこから来ているんだよね。最後に
やぐら 檣が上がって、反転地に近いレベルで、「YES」がいいなあと。
平林 梯子をのぼって小さなYESを発見するのが、まさ
にオノ・ヨーコの作品なんですよ。荒川川と思っていたら
最後はオノ・ヨーコで、映像を見ると『SAY YES』で、混乱
させられる。でも、荒川とオノ・ヨーコの関わりを知ってい
ると、そこにも掛かっているのかなという見方をしてしまう。
—

鳥羽 今ご覧いただいたように、プロムナード 木道の両側の草原にま
だまだ余白があるんですね。毎週末、そこでフードマルシェ
やイベントをしました。地元の高校生が養老名産のひょう
たんを使ったイルミネーションワークショップをして、廃線
危機のローカル線を元気づけようと養老駅に飾る活動と
か、枯れて倒れてしまった養老紅葉を使った木工グッズを
ミュージアムショップが売るとか、いろんなことが、ナデガタ
が作品を作って帰った後に起こっていたんです。私は美術
館ではお客様の様子を一日一度は見るようにしているん
ですけど、《Parking Promenade》では、明らかにお客様の
顔が違うんです。野外の解放感に溢れて、さらに自分と向
き合い、自分の経験を消化しなおしたようなスッキリとした
顔になっているのが印象的でした。先ほどみたいに、分刻
みでのスケジュールで動いている館長が、オープニングでは、
本当に幸せそうな顔で、草原に寝転んで空をみたり散策し
たり、ゆったりとした時間を過ごしていたり。そういうことが、

《Parking Promenade》の周りで、まるで道の周りの街で興
るかのように起きていたんです。その中の一つで、福井先
生の上多度小学校に、ナデガタがリサーチに行ったらCMを
作ったら、オープニングに全校生徒が来てくれた。

福井 うちの学校はクワガタとカブトが飛んできて、ト
ロの学校みたい。純朴だからこそ、いろいろ違う世界を
見せてあげたい。で、話が進んで、ナデガタに来ていた
だけることになって。

オープニングで子どもたちの可能性を出してあげたいと
思ったときに「私は死なない」がキーワードだと思った。
剣道が好き な子、ダンスが好き な子、けん玉とかすごく練
習して。調整には苦労したんですけど、好きなことをやら
してあげたいという思いでした。「チャレンジ!」という、
やりたいことを思いっきりやろう、明日を信じるという歌
を全員で歌った。ありがたかったです。反転地って、地
元では意外と身近ではないんです。でも、「ディズニール
ンドより楽しい」って子もいる。全部作られたファンタジー
の世界で楽しむのもいいんだけど、そんな感性の子を育
てていきたい。地域の「オラが素敵なミュージアム」で、
地元が繋がるようなことができればと思っています。その
きっかけをくださった。

中崎 先生に挨拶に行こうって気分でしたら、「全校集会
の準備してあります」って。30分くらいで即興でCMを作った。

福井 子どもたちは、アーティストって気難しいと思っ
ていたら素敵なお兄さんたちが来て、本当に喜んだ。

中崎 朝に撮って、帰りの集会で見せるっていう、山城
さんスピード編集。

福井 作り方も即興で、「こう動いて」ってタツカ作って
いくんですね。お昼は給食を食べていただいて、その横で、
山城さんが編集をしてて。アーティストってすごいって子
どもたちは感動していました。子どもたちはいまだにCM
の話をしますね。

山城 上映したら爆笑でしたね。全員の顔を映してあ
げたいなというのがあって。YouTubeにアップするよ、っ
て言ったら、みんな「えー! YouTube!! YouTuber!」っ
てすごい喜んで。素直ないい子たち。

中崎 オープニングもちょっとした出し物があるつもりで
いたら、「子どもを選抜してものすごい練習してる!」みた
いな状況になっていた。あと、養老と東京の2拠点で活

動をしている安田綾香さんという建築家の方が、祖父の住んでいた由緒ある養老のお屋敷が空き家になっていたのを、自身でリノベーションしながらアーティスト・イン・レジデンスもやっていたので、僕もそこに滞在させてもらいました。あと、(地元の)大西自動車さんとか岐阜ダイハツさんとか、メンテナンスは、いろんなプロフェッショナルな方や、ふつうの地元の方が手伝ってくださった。鳥羽さんに直接、実際の運営周りはやってもらっていたので、僕は把握しきれないくらい、会ったことすらない地元の人もいたりして素敵なプロジェクトに関われてよかった。

野田 私たちにとっても、住んでいる街からはかなり遠方のエリアで、野外であのレベルの大規模作は作ったことがなかったんです。町の中ではなく公園というレジャー施設のなかで、どういふとっかかりのなかで作ろうとかなり悩んだんですけども、町の人と関わりながら、荒川修作への自分たちの返答も含まれた、いい作品ができたなあと思っています。あと、美術館の中で作ってないものを、アーカイブとして美術館で展示することの重要性を改めて考えさせられるプロジェクトだった。

山城 美術館外に出るプロジェクトは、岐阜県美術館だけでなく、全国の美術館でどんどんやっていったほうがいいなと思いました。美術館建設って、地域にとって大きな出来事だと思うんですが、できちゃくと、建物の中でやることを考える。けど、実は、美術や文化やアートの出会いは美術館の中だけじゃないので、知識や技術をもった美術館の人たちが外に出て行くことは、どんどん望まれていくことですね。幸運にも、このプロジェクトはまた展示ができたのもすごくよかった。また集まって話ができるのも、文化の基地としてここ・美術館というベースがあるから。県の公園って県内にたくさんあるらしいから、鳥羽さんこれから10プロジェクトくらいやっていくんだなあ！たいへんだなあ！

中崎 記録集やドキュメントについて話を少し。今回の展示で、サイトスペシフィックなプロジェクトを、再現性のある何かものすごく工夫した新しい一手を打てたかというところというのはなくて、スタンダードな、写真・映像・パーツを組み合わせて情報が整理整頓されたドキュメントなんです。体験していない人と距離感をどうやって縮めていくんだろう、というテーマは、僕らずっともっているんですけど、限界

があり、なかなか解決しない、縮まらない。難しい。

平林 当事者は、どうしても経験のフィルターを通してドキュメントに向き合うことになるし、それは今更外せず、初めての人たちにどう映るかを想像しようがない。知っていることを意識的に忘れるという無理難題は荒川さんの作品と通じる部分でもあると思うのですが、その行為自体にも意味があるのかな。ナデガタの作品って、全貌を理解しようとするとか疲れるんです、情報量が膨大で。だから、展示で全てを語るのは無理で、かといって文章で説明するとイメージは逆に萎んでいってしまうので、今回みたいに部分的に実物を組み込んで、リアルから想像を膨らませるのは、ひとつの正解じゃないかなと思いました。

中崎 僕はもともと絵画から来ていて、出来上がっている絵を壁に掛ける展覧会って、すでに定着された、再現できるものと思っていた。インスタレーションは理論上再現できるかもしれないけど大規模な同じ空間での展示はほぼないと思うと、2か月3か月のプロジェクトベースの作品の展覧会期間はある種のライブ。大規模なものは材料を一部破棄するケースもあるから、長めのライブであると気付いた。絵画とか彫刻ベースでいうと、オリジナルが存在しなくなるということで、こういう記録集自体がオリジナルと同じ価値をもって残る。それは、荒川さんのネオダダとか70年代のハイレッド・センターの時代のことか、チラシや副産物だったはずのものが唯一の窓になってオリジナルになっていくのと同じかー。そういう関係を揺らぎながらやっている。

平林 オリジナルに当たれる時間も場所も限られているじゃないですか。だから、目撃者を増やし、その言葉が広がって、複製されることで生き続けるということを私も考えていて。ライブは終わってしまったらドキュメントしか残らない。目撃者、証言者の存在とその豊かさが重要かと。そして、そんな語り部のための舞台も、今後もっと必要になってくるのかな。

中崎 証言者って大きいですね。荒川さんの頃、中原佑介さんは小さい規模のイベントも全部見ている。僕らは、100人200人しか目撃者がいないオルタナティブな作品もあれば、逆にこういう大規模だったり芸術祭とかだと何千人何万人。だけど、ふとした瞬間に、「あ、これ語り部になる専門家は3人だな」とそのギャップがある…。

鳥羽 さきほど、館長がナデガタに依頼した理由の一つとして「巻き込む力」と言い、ナデガタさん自身も「コトが起こる過程自体を作品化する」とおっしゃられたんですが、今回は、養老公園というお題で、(公園内に)人が居ないので、そういうことが実質無理で悩まれ、反転地へのオマージュとして、非常に見応えがある作品をつくった。一方で、周りで何かが起こることを許容する状態で作品を置いていかれたというのは、「コトが起こる過程」を委ねたという意味で、ナデガタさんにとって新しいタイプの作品なのかなと思いました。

「美術館でのリニューアルオープン展にも」と最初から依頼しつつ、「非常に難しいだろうな」と案じていました。結局、記録集をベースにしたドキュメント展というかたちでまとめられた。私は出版畑出身だからか、編集がしっかり入った本という形式をすごく信用していて。写真家が、オリジナルプリントだけでなく作品集も別のかたちの作品として扱うのと同じ態度で、これからプロジェクトの記録集をつくっていきたくて思いました。この作品を通して、美術館が所蔵品をもつことだけを究極の目的として、150年前にできた美術館制度をあくまで守り続けていくことは果たして正しいのか、2020年以降のその先のアートとの関わり方を考える機会になりました。

会場からのご質問あればぜひ。

会場 荒川さんの作品をコレクションしている名古屋市美術館でボランティアをしていました。当時は、「死なないためにアートする」という荒川さんのコンセプトが腑に落ちなかったんだけど、今日、展示を拝見して、芸術という行為が残っていくというのはすごく納得できました。で、質問は、今回のプロジェクトは、公共の公園に車を乗り入れ、停めるのがたいへんな制約があったんじゃないか、そのあたりは鳥羽さんがすごく整理されたんじゃないかと思うのですが、舞台裏のことを聞きたい。

中崎 大変でしたね(笑)。調整池は、雨のあと、鳥羽さんと業者さんが見に行ったら案外水の量も大したことない。タイヤの下にブロックを入れてとかで、なんとかして。土の柔らかい所があって、プレハブ建設のために大きいトラックを乗り入れたら、ぬかるみで相当ヤバイことになって、プロジェクトXみたいになった。

野田 大西自動車さんという車屋さんが反転地の近く

にあって。見ず知らずのアーティストなのに「車を貸して欲しい」と頼んだらすぐに理解を示し、協力してくださった。さらにオープニングのときのご挨拶で、「今日からは僕が責任をもつ」って宣言してくれて。まさかの自分ゴトになって、会期中は何回もメンテナンスに来てくださって。

中崎 大きいトラックの斜めになった荷台が万が一緩むとヤバイって、オリジナルの鉄鋼の支柱を作ってくださったり。バッテリーが上がるのを防ぐのを一台一台。岐阜ダイハツさんにも何台か新車をお借りしたんですが、勢いでペーパードライバーの極致だった鳥羽さんが「私もこれで養老に通っちゃおうかな」と車を買ったけど、1回も行っていない。通勤にも、大雨の日しか乗っていないくて、買って一年経って1回しかガソリン入れてなくて、「すごい燃費いいんです！」って(笑)。

会場 地元の人が保守していたのですね。感動しました、ありがとうございました。

鳥羽 大西自動車さんは、美術館でのギャラリートークにも、仕事が終わってから、終了間際にかけつけてくださったんですよ。では最後に、福井先生と平林さんから。**福井** 自分ゴト、まさにそのとおり。学校帰りに会場に寄ったり、地元の人でもだんだん気持ちが入って愛していく。今回、美術館を離れた場で、思いとかコンセプトで人が出会って、化学反応を見せてもらえて嬉しかったし、これからも教育現場でできることはいっぱいある、アートも教育も根本は一緒だと改めて感じた。また一緒に飲めるといいな。

平林 個人的な感想ですが、この美術館は最初の就職先で、当時はこのようにお話をさせていただける機会はなく、初めての機会が今日なんです。反転地にいた約10年の間に日比野さんにワークショップを4回ほどやっていただいて、その後勤めた金沢21世紀美術館での日比野さんのプロジェクトを通じて岐阜と繋がって、今神戸の横尾忠則現代美術館という、全く関係なさそうな場所にいながら、縁が繋がっている不思議さ。美術館って作品ありきの場ですけど、人と人の繋がりもつくっていく場所だとしみじみ感じます。

鳥羽 ありがとうございました。

紅茶を楽しむTea Party! ワークショップ

様々な人が集まり、談笑しながら紅茶を飲み、作品の鑑賞体験を分かち合っている—そんな情景を実現したい。

セカンド・フラッシュというタイトルから生まれたこの企画は、館外での経験を共有するという展覧会の趣旨と、多目的ホールという場の新たな可能性を探るために、コミュニケーションに焦点を当てました。多様なイメージを受け止められるよう、100種類以上のフレーバーティーを楽しめる地域の専門店と一緒にアイデアを練りました。



まずは「ファースト・フラッシュ」と「セカンド・フラッシュ」を飲み比べ



作品鑑賞 各自作品のイメージに合った香りの茶葉を探す



気になった紅茶をリクエスト。感想を共有する



他者と一緒に新しい感じ方を発見していく

「これは大人の香り…Diorの香水みたい!」と直感的で自由な発想も、香りによって一気に共感が深まります。「ナデガタの作品はピクニックみたいな楽しい感じ」と爽やかな柑橘系の紅茶を選ぶ人や、「微分帖は秋の夜長に合うスモーキーな中国茶の香り」など次々と言葉が出てきます。参加者同士は全員初対面にも関わらず、鑑賞・飲食という共通体験がコミュニケーションを促し、話は止むことなく続きました。

この効果はワークショップ後も続き、再度一緒に展覧会を見に行くグループや、「人と人、美術とつながるのが楽しかった」とアートコミュニケーター「～ながラー」に応募する方など、想像以上の展開につながりました。また、嗅覚と味覚は新たな美術館体験をもたらしました。展示室で鑑賞と共に茶葉の香りを嗅ぐことが記憶を強化し、多目的ホールに場所を移しても、感覚を他者と探るキーとなりました。嗅覚と味覚は個人的経験と結びつき、感じたことをより表現しやすくします。知識や対話を手段とする作品鑑賞を超え、作品鑑賞を機に気持ちや経験を共有するコミュニケーションへ。リニューアルオープンに相応しく、新しい扉を開くことができました。

アンケートより



現代美術はあまりわかりませんが、今回新しい楽しみ方を教えてもらった感じがしました。



自分の言葉で見た作品のことを語るのは難しいけど「〇〇っぽい」と何かにたとえて語るなら、比較的ハードルも低く、楽しく話せてよかった!

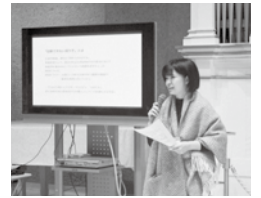


紅茶とからめて美術品を感じる、ということが新鮮でおもしろかった。

平野真美×ナンヤローネ アートツアー 信頼できない語り手

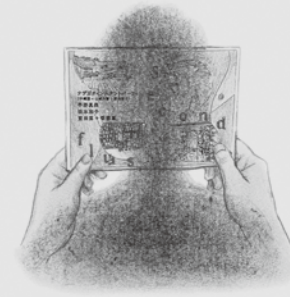
「ナンヤローネ アートツアー」とは?

アートコミュニケーション作品《Such Such Such》の手法を取り入れた鑑賞プログラム。作品を鑑賞した時に感じたことを様々な方法で表現したり、参加者同士で交流することで、多様な作品のみかた、感じ方を楽しみます。今回は平野真美さんが、「信頼できない語り手」をテーマにアートツアーを企画。4つの作品にまつわる架空の設定や物語を想像し、それを共有することで、展覧会で前提とされている作家紹介・作品解説に頼らない、自らの想像力を飛翔させた鑑賞へとつなげました。



信頼できない語り手
(Unreliable narrator) とは

小説などで用いられる手法であり、前提条件として提示される文章や設定は無批判に鵜呑みにしていいという認識を逆手にとった叙述トリック¹。語り手が語る内容が実は真実と異なり、読者を惑わせミスリードする。



アートツアーでは、この叙述トリックを美術館のフォーマットへ置き換えてみます。作家は主観で話すため、作品にとって一番の「信頼できない語り手」であるといえます。では、展示室にある、挨拶文やハンドアウトが「信頼できない語り手」によるものだとしたら?“人間は日常的に触れる情報のうち8割を視覚から得ている”といえます。8割のうち作品にとっての真実をどれほど受け取れているでしょうか

平野真美

註1: 小説という形式自体が持つ暗黙の前提や、偏見を利用したトリック。

ハンドアウトについて



1



2

1. 展覧会会場で配布しているハンドアウト(解説などが書かれた印刷物)のフォーマットに、アートツアーの参加者が想像した架空の設定や物語を書き込み、オリジナルハンドアウトを作成します。
2. ツアー後半は、グループ同士でハンドアウトを交換し、他のグループが作成したハンドアウトを見ながら作品を鑑賞しました。

ハンドアウトに書かれた内容(抜粋)



1



2



3



4

1. このさくひんは「いのちの道」。車が生まれる前、母親のお腹に入る前にこの道を通る。この道で18個のことを学んでお腹に入り、車として生まれる。
2. 作者は男性。再生、人体をテーマに作品を制作していたが、批判を受けて、ユニコーンの制作に切り替えた。ユニコーン作品は評価を得て、それ以降作者はユニコーン作品に注力するようになった。作者は手先が器用だったが、ある時障がい

- 負い、思うように制作できなくなっていく。それでも作者はユニコーン作品を制作し続けた。壁に展示されているのは、晩年の作品である。
3. 「巨人のお絵描き」。10mの巨人が裸で水浴している姿。地中海の地図を合体させている。
4. 題名は《お花し畑》です。山にすむ鳥「ぎ」と「ふ」は文字を作っている。山には沢山の葉があり花にお話の花が咲く。

宮田篤+笹萌恵
おはなしあそび 微分帖



古田祥子
ペンびぶんフレンドクラブセンターぎふ
担当監視員

おもしろいものに会い、ひとりにやけていた。この空間にいと穏やかな気持ちになる。どんなお客さんが来て、どんな作品が生まれるかな〜。

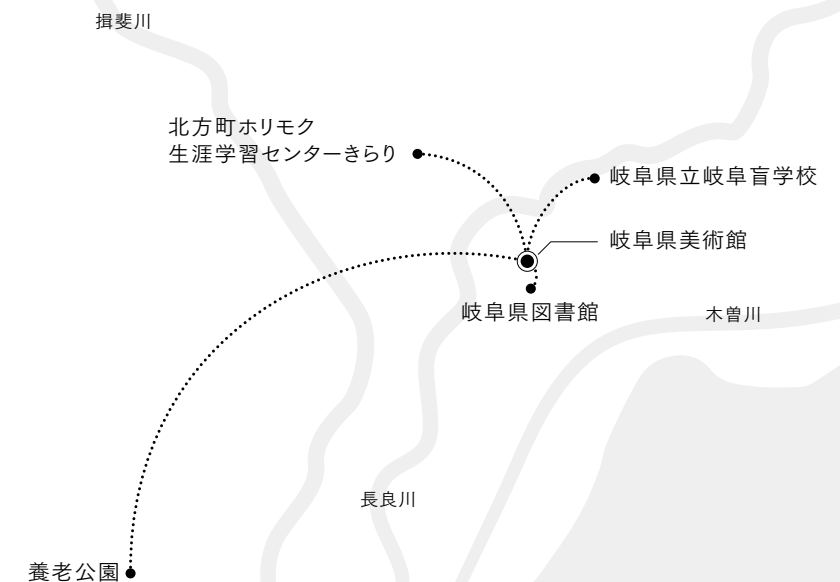
微分帖を読み漁る時間が好きだった。置いてある椅子やソファーに座ると仕事を忘れ、自然と溶け込み…時々自分自身と向き合って…。宮田さん・笹さんが織りなす穏やかな空間含めた微分帖の魅力がそうさせてくれるのかな。これからの微分帖の可能性を広めるために、呼ばれればどこへでもゆく覚悟はできています。



日比野祐大
(加納高校普通科1年生)
ペンびぶんフレンドクラブセンターぎふ
“インターン”

夏休み、図書館で、微分帖の「仕組み」×「ひととの関わり」にはまりました。今度は、美術館で、たくさんの方に微分帖の魅力を伝え、交流して自由に話せる空間を作りたいと、毎週末活動しました。「読んで」と持ってくるお子さんも、「またきちやいました〜」という親御さんもいました。僕は教員志望だったのですが、「地元で活動したい」「美術を学びたい」「人と関わる場の創造」も考えるようになりました。心を開いて教育の本質についてアドバイスをしてくださる方たちもいて、とても嬉しかったです。少しずつですが、成長を実感できました。

Commentary





あるきながら、かんがえる

荒川修作＋マドリン・ギンズ東京事務所
代表 本間桃世

荒川修作とマドリン・ギンズは代表作である「意味のメカニズム」について、よく(同作品を)「鑑賞」するのではなく、「エクササイズ」することが大切なのだ、と語っていた。養老天命反転地を借景としたNadegata Instant PartyのParking Promenadeを訪れたのは秋晴れの美しい日だった。それはまさに大掛かりなエクササイズ場であり、ナデガタ作品の中でアラカワに出会いながら18のトレーニングを積むプロムナードを辿ると、わたしはさっきまでのわたしではなくなっていた。Not to Dieの小屋ではその体験と遠近の過去の記憶といろいろな感覚が瞬時に交錯し、少し泣いてしまった。

入口とゴールはあるものの、何通りにも歩いてその都度新しい体験ができるのもまた、素晴らしかった。

アラカワ作品は立ち止まって見てはいけない。絵画作品のタイトルにも動きが内包されていることが多く、私はあぁナデガタのpromenadeも動詞だったのだ、と嬉しくなった。

「AiM 平野真美 Meets 岐阜県立岐阜盲学校」を通して

岐阜県立岐阜盲学校 図工・美術科
教員 嘉本千晴

児童生徒は、創作活動を職業としているアーティストの平野さん、創作活動を支える美術館スタッフたちと共に制作をすることで、生み出す過程や自由に表現することの楽しさを体験することができた。

図工・美術の時間に「どうやって作るの?」とやり方にこだわる児童に「思ったように作ればいいよ」と答えていたが、それでもなかなか自分がいいと感じたことを作品に表すことにためらいがあるようだった。しかし、平野さんが、ユニコーンの内臓を生々しく作ったり、ポンプで血液を循環させたり、酸素を送ったりなど、考えたことを自由に表現していることを目の当たりにして、創作活動の発想の面白さを感じることができるようになった。

児童生徒は、自分の考えを表現することに特に制約はないと考えるようになった。桜や葉、海、炎の要素をどのように取り入れるか考え、セロハンを使って海の透明感を表現したり、花の感じを取り入れた角を作ったりして、自分の中でいいと感じることを表現できるようになった。自分の感性や意図を大切に、表現する楽しさや葛藤を経て、作品が出来上がる喜びを味わうことができた。

AiMって素晴らしい

北方町ホリモク生涯学習センターきらり
所長 有里弘幸

最初、岐阜県美術館よりこの企画の依頼を受けたときは、自分もあまり興味なくいつも空いているところを使っていただけなのは、ありがたいぐらいにしか思っていませんでした。

しかし、アーティストの松本和子さんにお会いし、作品の制作がはじまってからは、私の気持ちの中に変化があらわれました。松本さんの作品制作への意欲や作品の制作過程を見ているうちにワクワクしてきました。そのうち地域の方も見学にこられるようになり、少しずつ活気が見られる様になりました。

完成が近づき、あの巨大な作品が全貌を見せ始めると、すばらしいという感動しかありませんでした。

今回終了しましたが、またこんな機会があれば、是非、この生涯学習センターを使っていただきたいと思います。松本和子さん、そして県美術館のみなさまありがとうございました。

人とつながって表現する素晴らしさ

岐阜県図書館
職員 大野智子

展示室を訪れるたびに作品が増え、読むのが楽しみでした。短いセンテンスのものもあれば、長い文章で書かれたものもあり、「すごい」「おもしろい」と思う作品があふれていました。人とつながって表現する素晴らしさを訪れた皆さんにも味わっていただくことができたと思います。毎日一緒に制作に取り組んでくださった宮田さん、笹さん、本当にありがとうございました。

楽しい夏をありがとうございました

岐阜県図書館
司書 和田聖子

宮田さんと笹さんが公開制作をされた展示室は、いつもは静かな空間ですが、今年の夏は少し違って、お2人と会場を訪れた皆さんが語らう声が聞こえてきて、にぎやかでした。のぞくたびに様子が変わっていて、作家の方が作品を制作していく過程を見ることができたし、完成した展示は壁一面の微分帖に圧倒され、そして歩き回ってあれもこれも見たくなるものでした。楽しい夏をありがとうございました。

アートプロジェクトは転生する。 —生活から美術館に—

山下里加

アートジャーナリスト/京都造形芸術大学アートプロデュース学科教授

『セカンド・フラッシュ』展は、その軽やかで魅力的な響きを体現した展覧会であり、同時に複雑な構造と問いかけを抱えこんだ展覧会でもある。この2つの性質をできるだけ丁寧に、慎重に解き明かしたい。

複雑さのひとつは、その名の通り「セカンド」である点だ。ここでの「ファースト」とは、美術館内で行っていた2つのプロジェクト、「アートまるケット」(2015年～)と「アーティスト・イン・ミュージアム」(2016年～)をリニューアル休館中に美術館の外で実施したものである。4組のアーティストは、岐阜県内の4つの施設に滞在し、それぞれの「場」の特性と人との出会いを吸収しつつ制作し、その場で成果をお披露目している。「セカンド」は、これらが「場」に深く結びついていることを十分に承知しながら、美術館という異空間に召還する意図を持って企画された。では、それらは何者として再構成されたのだろうか。

平野真美と松本和子は、「場」の経験を、作品として再構成したアーティストだろう。

平野は、ユニコーンを自身が創り続けることでその存在を証明しようとするアーティストである。露わになった内臓や延命装置と繋がった赤い液体が流れるチューブはグロテスクな印象も与えるが、想像と現実、見えるものと見えないものの境界線の上に辛うじて存在する繊細な作品でもある。岐阜盲学校に滞在した平野は、視覚

に頼らずに生活する生徒たちと交流し、「在るのに見えていない世界」に踏み込んでいった。あの「場」で平野と生徒は新たなユニコーンを共同制作した。美術館で展示された2頭のユニコーンは、チューブで繋がり、その中を流れる赤い液体は、壁に点字でリルケの詩を書き記した。果たして、これは誰の作品だろうか。誰に見えている/見えていない作品なのだろうか。2頭のユニコーンは、見えるものと見えないもの、晴眼者と盲人の境界を霧散させ、分かれ難いものとなって静かに脈動していた。

一方で松本は、「場」と間をとることで美術館での展示を成功させた。「ファースト」で松本は、北方町ホリモク生涯学習センターきらりに滞在し、壁面に幅10メートルの巨大なフレスコ画を制作した。「セカンド」では、その表層を剥ぎ取るストラップ技法を用いて、鮮やかな色彩が写し取られた薄布をフレスコ画本体の壁の前に垂らした。観客は、軽やかな布と漆喰を塗りこめた壁の間を行き来しながら、単体としても、画とその支持体であった壁を重ねて眺めることもできる。松本がフレスコ技法で描いた陽光に烟る寝室、天蓋ヴェールで囲われた空間と、美術館の空間が重なり合い、合わせ鏡のように幾重にも視線を吸い込んでいく。レジデンスの「場」とはいったん切り離された作品空間であり、見ることに集中させる美術館ならではの展示であった。

アートプロジェクトの再構成というオーダーに、宮田篤＋笹萌恵とナデガタインスタントパーティは独自の応答をした。

宮田＋笹は、本や物語を見ず知らずの他人と作り上げる“仕掛けや仕組み”を提案するアーティストである。「ファースト」では、岐阜県図書館に設けた「自習室」で、その「場」に居合わせた人同士のズレを楽しむ仕組みをつくった。美術館では、エントランスにその成果を展示し、さらに文通という手法を持ち込み、遠く離れた別の「場」との交信を呼びかけた。図書館が先人の知と出会う場だとすれば、美術館は未知への飛び込み台である。宮田＋笹は、文通という懐かしい仕組みを使いながら、未来に思いを馳せる「場」を美術館に仕掛けていた。

複雑な構造を軽やかにいなしたのが、「アートまるケット2019」の招聘アーティスト、ナデガタインスタントパーティだろう。彼らの「ファースト」は、荒川修作＋マドリン・ギンズの代表作である《養老天命反転地》の隣に約110メートルの遊歩道を作り、その道端に10台の車やテラスなどを設置した大規模な体験型作品だ。38日間で2万6千人を超える来場者、11のイベント、地域住民との交流など、あの「場」を語るエピソードは膨大にある。ところが「セカンド」は、長い展示台に『Human Driving School/わたしがたわしで死なないための18の教習』のテキストを

配し、数枚の写真と映像、現地で使用した看板やタワシなどを並べただけだった。あの「場」に満ちていた身体性や関係性は洗い流され、テキストだけが残った。これは、何か？

興味深いのは、「ファースト」が荒川＋ギンズの作品コンセプトの再構成であり、「セカンド」は自身のプロジェクトを再構成するという入れ子構造になっている点だ。その入れ子を閉じるのが、このテキスト＝スコアだったのではないか。野外のアートプロジェクトで広がった“アートな体験”を回収し、美術館に収めるには、コンセプトと手法を記したスコアがピッタリとハマる。そして、アートプロジェクトを美術史の系譜に接続しつつ読み解く楽しみが加わった。

最後に。『セカンド・フラッシュ』展の問いかけとは、アートプロジェクトの作品批評の可能性/不可能性だと考える。館内にアートプロジェクトを招き入れた岐阜県美術館は、その批評を生成する場にもなるだろう。アートが死なないために。美術館はその役割もリニューアルし続ける。

セカンド・フラッシュとは

鳥羽都子

岐阜県美術館 学芸員

本展は、美術館から離れたものを今一度美術館に引き寄せ、作品価値の普遍化や新たな鑑賞者との共有を試み、美術館の可能性を探るものである。

さらに、できるだけ丁寧に、なぜその場所で行ったかの解説やメイキングの紹介をすることで、関わって下さった方や場に報いることに繋げたいという思いであった。

当初、「アウトリーチの持ち帰り展」として、館内では「インリーチ展」と仮称されていた。アウトリーチを、狭義の「公的サービスを容易に享受し得ない人々への働きかけ」と解すれば、“外界から隔たってしまった美術館”は、ある意味、社会からアプローチをしてもらうべき存在、といえる。その意味では、考えさせられるタイトルだったのだが、最終的に、リニューアルオープンの秋に合わせ、収穫にまつわる語「フラッシュ」を採った。日本人の耳には、「セカンド・フラッシュ」は、flush(芽吹き・ほとばしり)と、flash(閃光・ひらめき)のどちらのイメージも喚起することに、本展への期待を込めている。

作品は、それぞれ、サイトスペシフィックな作品の再結晶化としても見ることができる。うち3つを展示室に、1つを陽光さしこむオープンエリアに展示した。順に紹介したい。

**Nadegata Instant Party
(中崎透＋山城大督＋野田智子)
《Parking Promenade》**

薄暗い通路を抜けて広がる展示室に、黄色いバランスボールを消失点とする一点透視図法のシャープな空間が広がる。巧みな空間構成である。

心躍らせるような全長110mの野外作品を、再設営でも部分再生でもなく、美術館の展示室にいかに創造的に凝縮するか。その答えとして、彼らは、映像や作品のパーツ、写真やテキストで構成したドキュメント展示を用意した。身体性や娯楽性を削ぎ落したことによって、《養老天命反転地》へのオマージュという作品の根幹が俯瞰

され、受け手はそれぞれのプロムナードを脳裏に出現させ得るのだ。

「インスタントなパーティ」を引き起こす手法が印象的な彼らだが、結成時に20代だった彼らも30代後半から40代を迎え、それぞれが活躍の幅を一層広げている現在、研ぎすまされていくのは、場の根源的課題を美術という行為で思考する、理知的な表現なのかもしれない。

荒川は、病院や学校もある「天命反転都市」を構想し、《養老天命反転地》はその一部であるという。その、大学も博物館も図書館も制度の垣根を超えるという構想は、今なお継続可能なものとして、「NOT TO DIE」の切り文字を掲げた美術館の展示室に転生したともいえる。

**平野真美
《蘇生するユニコーン》《手のためのタピスリー》**

平野は、視覚と創造の関係について深く思索を巡らし、自身の作品と盲学校の子どもたちとの共作を、抑えた光の中に静謐かつスリリングに提示した。二体の生き物を繋げているのは、透明のチューブにユニコーンの血が流れることによって、目でも「読める」ようになる「半立体点字タピスリー」である。引用されたのは、リルケが一角獣を謳った詩より、「おおこれは存在しない獣 人々は穀物ではなく いつもただ存在の可能性だけで それをはぐんだ」の一節である。これは、ユニコーンや盲学校の子どもたちだけではなく、二つの存在の間に関係が生じることによって、それを読む誰か、生命や創造の成り立ちそのものをも表している。

6年前、作家の夢や希望を蘇生させるために生まれたユニコーンは、2018年頃に作品の生命・自我へ、そして今回、視覚と創造の探求へと深化した。テーマが変わりゆく平野のライフワーク作品を見守る喜びは、作家と共に、実在・非実在、生命と想像力を巡る旅をすることに似るのかもしれない。

**松本和子
《いぶきがきらり》**

松本は、乳白色の漆喰を部分的に塗り残してグレーの下地をあえて見せた壁画の前に、その表層をはぎ取ってオーガンジーに移し替えた画を、光と風を透かすように吊るし、多層的な絵画表現を試みた。堅固な支持体から柔らかな布へ、その表裏へと、イメージは幾重にも継がれ、その時々偶然の痕跡とともに、空気のわずかな変化に揺らぎ、優しく包み込むようなレイヤー空間となった。

これまで人の気配が漂う空想上の西洋風の部屋を描いてきた松本だが、生後数か月の第1子を連れての滞在制作、それを見守る町民との交流を経て、淡墨桜の枝が窓の内外に入り組むなど、初めて窓外の景色と実在物をモチーフにした点を特筆したい。モチーフ、素材、制作地どれもが、“岐阜産”の作品といえよう。古典技法に魅せられ、壁画の現代的表現を試みる作家の新境地である。

**宮田篤＋笹萌恵
《ペンびぶんフレンドクラブセンター ゐぶ》**

《微分帖》は、ことばの連なりが変化したり、ズレたりして展開する「仕組み」の作品である。

宮田・笹は、AiMから連続する本展では、それまで対面で行っていた《微分帖》を、時間・空間的に拡張した。場と時を共にして生まれる即興的な双方向性ではなく、「明日以降の誰か」の目に留まることで、続きが創られる仕組みとしたのだ。LINEやチャットなど、即時的で必ず返事のあるコミュニケーション全盛の今だからこそ、かつての文通のように、いつくるかわからない返事を待つという時間感覚を復活させ、異なる声を聴く余地、異なる感性を共存させる場や経験が求められている。

仕組みとはオープンエンドなもの。それに誘発されるように、自発的「インターン」の高校生が、本展終了後も、別のレジデンス企画の「鑑賞者兼インターン」として頻繁に美術館を訪れ、ペンびぶんフレンドクラブセンターは、美術館の場づくり企画として、宮田・笹とアートコミュニケーターにより、ゆるやかに継続されることとなった。

おわりにー

多様性と社会包摂、地域との連携は、全ての美術館にとって課題である。改修期を迎えている全国の地方公立美術館は、ハードの改修とともに、その役割や機能、事業のあり方について再構築をするべき時期を迎えている。

成相肇は、「美術館という場所は通時的な記述と親和性が高く、共時性を考える機会が不足している」と指摘する¹。館長の日比野が本書の冒頭に寄せた「吸って、吐いて、吸って」のメッセージは、アーティストが地域で活動し、美術館で発表し、それがまた社会と“つながりかえる”ことでおきる新陳代謝や共生のことだとも言えよう。

場の磁力と共振したものを美術館に置きなおすことの矛盾には躊躇を感じざるを得なかったが、思いのほか、作家は喜んでくれた。ナデガタはアートプロジェクトの可視化に挑戦し、平野は点字を題材として視覚と創造のあり方を浮かび上がらせ、松本は建物に規定される壁画の宿命を軽やかに再構築し、宮田・笹は連歌などの座を思わせる関係性を現代に蘇らせた。4組それぞれ、いずれも既知のやり方を超えたアプローチであり、サイトスペシフィックな創作の遺伝子を、美術館という核に戻しそのイメージや特性を広く豊かにしてくれるものであった。アートと社会と美術館の関係の新たな可能性を探り、美術館活動の定義を推し広げる行為は、今まさに現在進行形であり、どう切り取り、文脈のなかに置いていくか悩ましい。だが、そのプロセスに参加することは、作家や学芸員だけでなく、鑑賞者や関係する人びと・地域にとってクリエイティブな経験であるはずだ。

モノ・人・場・経験という、まだ開拓の余地を残す美術館の特性に立脚して未来を展望すれば、美術館はさらなる可能性に満ちている。

従来型の「モノ」を中心とした思考を問い直した岐阜県美術館の「セカンド・フラッシュ」は、今はじまったばかりである。

註 i. 『絵画展... なのか?』川口市アートギャラリーアトリア, 2019, 10ページ。成相は、続けて、『『専門』や『研究』という言葉は領域の確定を促進する指向性を持ちますが、そうしたわけで、僕はできる限り脱領域を意識しながら研究を行いたいと考えている』と述べている。

セカンド・フラッシュ

発行日：2020(令和2)年3月

発行：岐阜県美術館 〒500-8368 岐阜市宇佐4-1-22

編集：鳥羽都子、芝涼香、加藤恵(岐阜県美術館 学芸部)

デザイン：Artical inc.

写真：岐阜県美術館、宮川邦雄、三浦知也

印刷：日本印刷株式会社

Second flu/ash Report

Published in March, 2020

Published by The Museum of Fine Arts, Gifu

Edited by Toba Miyako, Shiba Suzuka, Kato Megumi

Designed by Artical inc.

Photo by The Museum of Fine Arts, Gifu, Miyagawa Kunio, Miura Tomoya

Printed by NIPPON PRINTING CO.,LTD.

